



號五十六第 月二年八十和昭 行發日十 行發日十・回一月毎 錢五部一價定 錢十六(共稅)分年 一才田杉 編輯行發 國公各地日區町市京東 社信通盟同 所行發 東東 108

職制再改革の意義

對外思想戰完遂を期し 新に海外局を設置

社長 古野伊之助

武力戰新段階に入る

二月一日レンネル島沖海戦の大 本營發表をはじめとして次々とソ ロモン群島を中心とする積極果敢 な戰況が發表せられるに及んで、 ニューギニア、ソロモン方面の戰 況の緊迫を認められることは諸君 が職場を通じて御承知の通りであ ります。

大東亞戰爭勃發以來相次いで の 敗戦に漸く戰時體制を整へ、その 龐大な生産力にものをいはせて、 何としても太平洋における日本の 攻勢に對して徹底的な反撃を加へ ようとする準備なり、アメリカ、 イギリスとともに力を協せてソロモ ン、ニューギニア方面を足場とし て執拗な反撃を繰返してゐる。

これに對してわが方においても 作戦上の不利にかかはらず、勇戰 奮闘を續けてゐる。また一方ヨー ロッパにおける戰況は、これまで われわれの職域、職場を通じて注 意してゐるが、必ずしも樂觀を許 さぬ情勢にあることは御承知の通 りである。

思想戰に挺進

太平洋の戰況を中心にみるも、

私が南方を一巡して南方各地に おいて、足らざる人が足らざる力 量をもつて、精いつばい苦闘を續 けてゐる有様をみて速に南方支社 局網の整備充實をはかる必要を痛 感した。

支那事變、大東亞戰爭と相續く 戰爭の結果、同盟の活躍する舞臺 は三倍になり、五倍になり、十倍 にも伸びてゐる。本社も支社局も 十分の人手を揃へることは出來な い。またかうした局面に直面して 直ぐに適材を得るといふことも思 ふに任せぬ事態にある。

しかるにもかかはらず、南方そ れぞれの持場において、最善を盡 してゐる社員の奮闘をみ、事態を 綜合して考へ、どうでもなるべく 早い機会に國內の地方各支社局、 本社各局各部分から選抜した増援 隊を南方に送る必要あることを痛 感してゐる。

また前線において奮闘を續けて 來た戰爭開始以來前線で戰つて來 た諸君を一應國內に呼び戻して、 さうして國內の同志の現地認識を 新にせしめる必要もあると考へて ゐる。

再び機構改革

かくてもつとも近い機会に社内 の機構を一變して相當大規模の人 事異動を行はうと決意したわけだ ある。

今までのわが社の機構は編輯、 通信、經濟、企畫、總務の五局を 配置してゐたが、今度の改革では 編輯、海外、經濟、聯絡、總務の

五局に改めることとした。 今度の機構改革の主眼點は編輯 局をしてニュースの蒐集と編輯な りびに頒布に關聯して國內の新聞 社を對象とする立場においた。即 ち國內の新聞社、放送局等に對す るニュースの取扱を目標とする仕 組みに切換へる。

從來の通信局および企畫局を廢 止して、その一部をもつて新たに 海外局を設ける。海外局は專ら對 世界思想戰を積極果敢に展開する に當つて全責任をもつて、その衝 鋒隊の眞意、實相等を徹底周知せ しめること、それから輻軸各國な らびに敵國に對する思想戰は全部 海外局當面の職責とする。充分の 企畫と充分の統一をもつて勇猛果 敢に思想戰を展開するため、海外 向けにニュースの編輯と頒布といふ 部面の仕事を海外局において責任 をもつ仕組みにしたのである。

總務局、經濟局は從前通りであ るが、これから南方の建設に對し ても戦力の増強に對して、わが經 濟界、殊に支那、南方に伸びゆく 帝國の經濟、産業の部面において

第二十五回 理事會開催

本社新年第一回(第二十五回) 理事會は去る一月十四日午後一時 十五分より帝國ホテルにおいて開 催。理事總員三十六名中二十二名 出席(他に委任狀十一名)、新理 事會長高石眞五郎氏司會の下に諸 般の議事を進めた。主な議事事項 は左のごとくである。

- 一、理事堀義貴氏任期満了につき 改選の結果堀氏再選、さらに常 務理事に推薦さる。
- 二、昭南新聞會創立の件
- 三、社員新聞社統合による異動お

- よびこれに伴ふ理事異動の件
- 四、職制改正、昨年九月二十一日 より實施の件
- 五、佐賀、臺中支局開設ならび に岡谷、松本、桐生、足利四支 局閉鎖の件
- 六、社屋ならびに附屬建物の件
- 七、職員養老保險制度新設實施に より年額約二十萬圓支出の件
- 八、經濟通信の改變および南方經 濟調査員派遣の件
- 九、南方通信施設整備の件
- 十、對外通信同報擴充の件
- 十一、昭和十七年度收支概況の件

以上につき古野社長より詳細報 告し、出席理事一同これを諒承、 午後二時三十分閉會した。

何よりの大きな證左である。 そこで特に聯絡局なる専門の一 局を設け、さうして一切の國內 國外を通じての飛行機輸送等をも 包含する一切の連絡施設の企畫、 充實強化に當らせることにしたの である。

各局は密接不可分

新職制は以上の總務、編輯、海 外、經濟、聯絡の五局とし、これ をさらに三十數部に分つてそれぞ れの仕事、同盟のこれからの全 活動を分擔して貰ふ豫定である。 がしかし、いつもこの職制を變更 し、機構を改革する都度痛感する ことは、何局何部と色々仕事の分 擔區域を分つてはゐるものの、全 部の仕事が結局は同盟一體、舉社 一體であるといふことである。 どこの局とどの局と絶対密接不 離の關係に立つてゐる。對世界思 想戰を積極果敢に展開するのであ る。海外局を設けるにしても、そ の活動に必要なニュースの取材 の殆ど全部は編輯局、經濟局に依 存するほかないのである。

(以下第四頁へ續く)

桐生、足利 兩支局閉鎖

桐生、足利兩支局は昨年十二月 三十一日限りいづれも閉鎖された 舊バタバヤ支局 呼稱を變更

宮崎支局開設

宮崎市に左のごとく支局を開設 した。 宮崎市高千穂通(日向日报社内) 同盟通信社宮崎支局

報道班員生活雑感

本社 波多 尚

貴重な體驗

わが國初めての試みとして組織された宣傳部隊の一員として徴用され、大東亞戦争第一年を南方戦線において活動する機会に恵まれた。しかも無事内地に歸還することが出来たことは、私の光榮とするところであり、またこれによつて非常に貴重な體驗を得たことを感謝してゐる。

同じく報道班員として活躍した多くの各新聞社の人々の間に伍して、私達「同盟人」は同盟との關係において特殊な仕事を受持つた者が多かつたことは著しい特徴であつて、これは同盟自身が報道宣傳の上において有する國家機關としての性質を、今次の總力戦において明確に押出して来たことを裏書きするものにほかならない。さらに一步を進めていへば、同盟の機構全體が國家機關として、即ち前線では軍の一機關として活動すべきものであり、個々の同盟人が今のやうな形で報道班員たることは過渡的な形態ではないかと痛感させられたのである。

もつともそれまで行くには尙若干の問題が存してゐるが、これらはいづれも可及的速かに解決されるであらう。私達が報道班員として同盟との連絡役を演じたことは、そこへ行く道程の一つとして必然的な段階であつたらうと思つてゐる。

待遇は曖昧模糊 私達が「陸軍徴員」といふ名稱を正式に與へられたのは二月頃だ

つたかと思ふ。 ツヤワ宣傳班の大木樗夫が歌つたやうに、身分がさまならない間の私達は、まづ兵隊なみに待遇されたために、色々の「雑音」を生んだ。赤紙召集のやうに一兵士として決定されたなら、それで納まるけれど、大尉待遇とも伍長待遇ともわからぬために命令系統にも、仕事の上にも曖昧な點が多かつたのである。

大東亞戦争の異常な衝動と緊張とは、或る程度かうした問題を後方へ押し退けたとはいへ、結局この問題は最後まで「委任」、「判任」の二大別以上には明確化されなかつた。

従つて司政官五等と、同額月給の委任陸軍徴員との序列など、たうとう私達には判らずじまひだつた。序列のやかましまし軍隊では宿泊給與、汽車汽船から仕事にまで影響して来るので、蒸し返し／＼私達仲間では話題になつたのであるが、おそらく陸軍徴員といふものは、大佐待遇か、少尉待遇かわからぬところに味があつたのだらうと思ふ。

心臓の強い同僚など、到るところで佐官待遇でおし廻してゐたが私など最後まで尉官待遇に大して文句をつける元氣が出なかつた。もつとも「好意的」に佐官待遇並みにしてもらつたことも稀にあるけれども、それもあくまで「好意的」だつたと解してゐる。

「名」の問題 各社の記者と一緒に報道班員として働いてみると、同盟人の意識

といふものが如何に違つてゐるか。とマザ／＼と感じさせられる。「○報道班員」と名前をつけるかつかないかの問題一つが、各社の新聞記者にとつて一大關心事であることが、私達にはむしろ異様にさへ見えたことなどその一例である。

同盟記者はその電報に名を附することなどテンデ頭でない。平常の下の力持ちを天職として、すべてを「同盟」の名で活動してゐるのである。しかし新聞は個人の英雄を作りあげろ。○特派員發とすることについて同じ支局の仲間ですら時々問題があると聞いて、私達にとつては、記事が出さへすればよいので、今度は「同盟」の名が「陸軍報道部」の名になるだけだと至極簡単に考へたのであつた。

しかし結論はこの一年、各紙に現れた通り、や／＼しい形で見出されることになつたことは御存知の通りである。これはまた知名の文士達の場合は別の事情が多分にあつて、特に名前を出したのでそれとの均衡もあつたことと思ふ。

記事のみでなく、寫眞の場合もまた同様である。同盟といふ旗幟の下に一九となつて、黙々と筆の力持ちに甘んずる傳統を、私はふと海軍の個人の名を出さぬ傳統とくらべて、ゆかしく考へたりしたものである。

同盟といふものの力は海外に出て初めてわかる。このことは私にとつて初めての経験ではなかつたが、今度同盟の組織の外にあつてしかも同じやうな性質の仕事をして特に深く感じたことであつた。同盟ニュースの海外放送は私達の仕事にとつて唯一最大の重要な武器であり、同盟の通信が第一のたよりであることは、内地におけるラジオに對する新聞の比ではないのだ。

同盟の偉力を知る 何しろ雑誌もパンフレットも、聞く所もない遠い南方で、世界的情勢、日本の趨向を知らしてくれれば、同盟ニュースだけなのだ。しかも同盟が専用無電を持つてゐて、ニュースやこれに關聯した問ひに、打てばひびくごとく答へてくれることは、全く命の綱のごとき信頼と力強さを感じる。

全世界はおろか、目前の全南方圏の寫眞すら常時、有機的に蒐集することの出来ない前線にあつて同盟の寫眞やウィンドー・ニュースは如何に有難かつたか。日本に於て新聞やグラフィックや色々の寫眞を見るチャンスに恵まれてゐる内地の人々の想像にもおよばぬものがあつた。同盟のウィンドー・ニュースを高く評價してゐる人は内地では同盟内部ですらさう多くはないかも知れない。

しかし前線では、現地宣傳の重要な、貴重な存在なのである。日本語普及が急務の今日、文字の讀めぬ現地人相手の宣傳には何も言はずでさう苦勞することはない。日本語説明で結構なのだ。寫眞と映畫はど／＼送つていいたゞきたいと熱望する。

私は始めて北ボルネオへ行つてガリ版の陣中新聞(もちろん日本語)を出して町角に張つた時、華僑が眞黒にたかつて、漢字を拾ひ／＼血眼になつて讀んでゐたのを思ひ出す。そして支那語新聞を出してゐる今日ですらなほ同様なのだ。恐らくこれで日本語を勉強してゐるものもあるのだらう。

南方に於ける同盟の役割 日本に、特に本社などゐる同盟の一局部にしか携つてゐなかつた私には南方で改めて同盟の全貌とその特質や今後の問題などを見直させる機会を與へられた。軍の

要求も國家の要請に對して同盟がどこまで應へ得るか、現在出来ることと出来ないこと、出来るのにやらせられてゐないのは何故か。緊急に必要なことがどうして早急に出来ないのか。それは同盟の罪であるか。國家の側に問題があるのか等々、色々と考へさせられることが多かつた。

端的にいつて急速な仕事局面的膨脹に人員、資材の不足に悩んでゐるのけ一同盟ばかりではない。しかし内地の統制強化による遊休人員や資材を南方に活動させるのみならず、全局を眺み合せて人員、資材の合理的活用をはかるのには、單に同盟内部だけのやりくりで出来るものでないこと誰が考へても明かである。新聞統合は單に新聞を減らすといふことではなく、かうした面から、もつと積極的に考へねばならぬことが多いと思ふ。

同盟の役割は南方問題だけを考へても一年前と隔世の運びである通信と、新聞と、寫眞と、情報調査と……大東亞の報道宣傳機構の骨幹を形成せねばならないのだ。そして同盟と最も緊密な關係において日映があり、放送局があり、映配がある。大東亞の全圖に組織的な、打てば響く通信網を張りめぐらすといふことだけでも容易ならぬ仕事であるが、その上その内容を充實するには全同盟人の一人入藝の大奮闘をもつてしても、まだ足らぬであらう。各新聞社等から同盟に對して色々の文句が殺到してゐる。その凡てが至當だともいへないが、少くとも氣のひける文句をいはいはれぬだけに一日も早く擴充し、飛躍することは、大東亞戦争の一翼を擔ふ同盟の「決戦」でなくてはならない。

同盟精神に生く 私は徴用の一々年餘、同盟人と

しての意識をもつて行動した。報道班員としての仕事と、同盟人としての意識とが何等の矛盾なく兩立し得たといふことは、同盟自身の國家機關としての性質に由来するもので、この點、同盟人の非常な幸福であつた。北ボルネオにおける七ヶ月の生活のとき、軍部は私に常に同盟記者として紹介した程であつた。しかも仕事の内容は報道宣傳の一切を含む宣傳班の業務一切を命令し擔當させて、首脳自身何等の矛盾を感じなかつたことは、一に同盟の本質の然らしむるところであつたらうと思つてゐる。

戦争初期五ヶ月のサイゴンにおける仕事も福田サイゴン支局長以下の全幅の好意と援助下に、陸軍報道班員たる私達が、海軍、外務の報道宣傳當局者からも圓滑な協力を仰ぎ得たのは、これもまた私達が同盟人だつたからである。そして事實上、仕事の大半は同盟本来の仕事であつたのであり、私達の意識では最初からサイゴン支局の仕事の一部を手傳つてゐるつもりであつた。その後、この仕事はサイゴン支局の業務中に編入されてゐるが、かうしたことで、一方に色々みじめな問題がありながら、何かと忙しく終始して、まぎらはされて来たのは幸ひな方であつたと感謝してゐる。

またこのことは逆にいへば報道班員の意識をもつて同盟人たることも何等不都合でない。むしろ國內における各新聞社との對立意識を止揚して同盟の獨自な國家的立場を明確に認識する時は純粹な報道班員の意識と合一するであらう。そして私は、この同盟傳統の縁の下の力持ち的な、没我的な精神こそ、こよなく尊いものと信じ

てゐる。

關東軍報道演習で我が社優秀成績

一月廿一日新東京出發以來雪の北滿國境一帯に劃期的報道演習を行つてゐた關東軍報道隊は一日新東京に歸還、二日午前九時關東軍司令部において解散式を舉行、感銘裡に報道演習を終了した。今回の演習は黙々と北邊鎮護を磐石の泰きにおき、米英撃滅の南方戰線をして後顧の憂なからしめてゐる關東軍の威容と、その無敵將兵の敢闘勇姿を密に報道するはもろろん社會の木鐸たる後方戰士の修練と陶冶をはかり、時局下の重大使命達成に協力するの念をさらに強化すべく、もつとも寒冷なる地方を選び、長谷川關東軍報道部長統裁齋藤少佐輔佐官、關東軍指導下に舉行されたものである。参加者は

百井信二君 名譽の戦病死

仙臺支局員百井信二軍曹は昭和十四年十一月應召、翌十五年三月勇躍中支戰線に出征以來約三年にわたり中支各戰線に轉戦、偉功を樹てたが、遂に二月五日名譽の戦

社長訓示

第一面より續く

舉社一體の活動

編輯局の諸君が新聞の紙面が縮少されるため、いくら書いても種をかつても、新聞に載りはしまいななどといふ、とほげた物の考へ方で、それぞれの部署で働いてをられるなどは、到底對世界思想戰を有効に展開することは不可能である。

また經濟局の立場から眺めてもわが同盟が國家の機關として對内對外に思想戰を遂行して行く中樞機關としての使命を果しながら、國の産業經濟の推進力として力いづばい働かなくてはならぬと考へても、經濟局の諸君がその分野に對する正しき認識を持たなければ適當な取材は不可能に陥るわけである。

結局舉社一體である。同盟全部

病死を遂げた旨原隊より發表された。同君は仙臺市中島町の出身、昭和十年入社、應召まで仙臺支局に勤務してゐた。享年三十一。

中支戰線に出征以來同君は幾多の作戦に武勳を樹てたが、特に大東亞戰勃發當日の十二月八日、部隊の上海共同租界進駐に際し速記術を利用して租界内のニュースを蒐集、作戦に多大の便宜をもたらした點は偉勳といふべきである。



互助會報告

〔十二月分〕

結 婚
篠塚 幸雄 經濟
松永 二郎 總務
大平 安孝 編輯

應召、入營

小糸 忠吾 (通信)
小島 洋 (總務)

出生

高田 爾郎 (企業) 長女
梶川 博 (名古屋) 長男
八木 久 (通信) 三女
廣瀬 道次郎 (經濟) 長男
荒川 利男 (編輯) 三女
植村 鷹千代 (企業) 長男
押田 次郎 (金澤) 同
吉谷 清次 (同) 次女
河野 幸雄 (高松) 同
佐々木 武雄 (札幌) 同
久保田 清松 (大阪) 同
小關 順平 (編輯) 長女

見舞

村取 末三 (經濟) 病氣
山村 貞臣 (福岡) 同
佐藤 八重子 (總務) 同
佐原 治平 (長崎) 同
池口 光治 (大阪) 同
多田 羅弘 (同) 同
榊野 強介 (同) 同
東村 種一 (同) 同
梶川 博 (名古屋) 同
勝田 次郎 (札幌) 同
荒井 秀信 (富山) 同

獨特の人物考査

さうしたことのためには間斷なく苦心してゐるつもりである。それで或は健康保險制度を整備して、養老保險制度を拵へてゐる。

私は四千諸君の將來と生活を一人で引受けてゐるかのやうな立場にあるが、日夜自分の力のおよばぬこと、眼の届かぬことに苦心してゐる。何とかして、これを組織の上に立派なものに仕上げて行かなければならぬ。四千人の同志諸君が自分の將來はこの同盟を死場所にして、死物狂の戦を戦ひつつ一生を明かに送つて行くのだ。しかして俺の前途は同盟が完全に保證し、しかしてまた同盟が俺の力いづばいに働かせてくれるのだといふ一人々々の胸にしつかりにした信念、信頼が生れて来たときに、同盟はもつとも立派にその

これは三年、五年やつて行く間には組織的に、その一人々々の力

退社

内野 正夫 (鹿兒島)
楊 士 焯 (通信)
松田 ヨシエ (大阪)
磯部 秀子 (同)
松澤 喜代子 (編輯)
宇田 里子 (總務)

また着手したばかりで、今すぐ効果があらうとは思はないが、だんだん年数を重ねるに連れて同盟四千人の一人々々が、充分正しくその力量、その勤勉振りを、その人の性格、その人の傾向等を明確に記録して、さうして適材適所にそれぞれの特長を發揮し得るやうな組織に仕上げたいと思つてゐる。(二月八日第十四回大詔奉戴日訓示)

量、平素の努力、健康状態、性格など極めて明確に評價されることになると思ふ。

弔慰

堀 義貴 (常務理事) 次女死亡
末富 三孝 (下關) 實母死亡
林 東作 (名古屋) 妹同
長井 登美 (釜山) 祖母同
中村 利直 (名古屋) 實兄同
浦中 薫 (熊本) 祖母同
細田 要 (神戸) 長女同
武田 尚昌 (編輯) 實弟同
近藤 ひろ子 (總務) 養母同
高橋 三治 (同) 實父同
上木 鐵之進 (編輯) 同同

竹森 素子 (旭川) 同
岡本 春一 (大阪) 同
熊木 啓作 (經濟) 長女病氣
河瀬 四郎 (大阪) 病氣
沖 篤 (福井) 同
金 栢 燭 (京城) 同
淺倉 泰 (編輯) 同
松本 重治 (同) 同
松田 常雄 (通信) 夫人病氣

編輯

合計 (件數) 三、七三〇圓
合計 (金額) 三、七三〇圓

曇り日の安全地帯に立
つて市電を待つてゐる
とき、鈍く光を反射する
レールの面をみるとなくみ
てると太刀魚の銀色の肌が
浮んできた。魚菜不足に
なるとはさういふことだ
である。

……ガダルカナルの牽制部隊は腹がへつても戦に勝つた。ガ島は俄島に通ずと誇りの洒落に精神的餘裕をみせたといふ。